

元連合赤軍メンバー！

馬込伸吾

〔映像作家〕

植垣康博さんのラストデイズ

田原総一朗さんが冒頭で挨拶し、元連合赤軍メンバーらが次々と別れの言葉を述べた「植垣康博さんを送る会」。植垣さんの最期までを映像で追いつけた馬込伸吾さんのインタビューも掲載する。

「植垣康博さんを送る会」に 関係者が集まった

4月13日（日）午後1時半、東京・文京区民センターで「植垣康博さんを送る会」が開かれた。大々的な事前告知をせず、植垣さんを知る方々へのお知らせを中心としたため、人数こそスタッフをいれて80人弱と少なかったが、登壇者の発言を含めて、とてもインテリメートな雰囲気包まれる会だった。

植垣康博、享年76。その人生は波乱に富んだものだった。弘前大学での全共闘運動の過程でブント（共産主義者同盟）赤軍派に参加。同派のM作戦（銀行から活動資金を強奪等）などの実行部隊の中心メンバーとなる。1971年に赤軍派と革命左派という過激な武装路線をとる2組織が合体して連合赤軍が結成されると、植垣さんも合流。しかし連合赤軍は警察機構の激しい追及に迫られ、榛名山などの山岳に隠れ住むことを余儀なくさ

れた。その中で、指導部からの各自への自己批判要求がエスカレートし、暴力的総括が発生。同志殺しの悲劇に至る。連赤事件という場合、72年2月の「あさま山荘」銃撃戦を思い出す人も多いだろう。5人の連合赤軍メンバーがたてこもり、10日間にわたって機動隊と銃撃戦を繰り広げ、機動隊の中隊長クラスの2名が撃たれて死亡。重機から吊り下げられた大きな鉄球で山荘が壊されるシーンはテレビ中継され、機動隊が突入した最

後の日のテレビ視聴率は89・7%に及んだ。

その後、連合赤軍メンバーの同志殺し（山岳ベースでは12人）が発覚。新左翼運動への支持が急速に冷え込む要因となった。

植垣さんはあさま山荘に立てこもるメンバーと直前まで行動を共にし、状況を探りに行った軽井沢駅で逮捕。このとき

一緒に逮捕されたのが、この日登壇した青砥幹夫さんだった。

植垣さんは山岳アジトでの同志殺害などの罪で懲役20年の判決を受ける。満期出所後は静岡市で「ふしぎな酒場 スナックパロン」を開店。事件に関心を持って訪ねてくる若い人とも深く交流。マスコミ取材に対しても積極的に発言した。

ここ数年、健康を害していたが、求められる取材は断らず、自分が語らなければという責任感が不帰への道を早めたのではないかと関係者は悔やむ。

「送る会」は3部構成で行われた。第一部では田原総一朗さんがハブニング登壇。「植垣さんには何度も番組に出てもらった。有難う。彼は真面目にこの国について考えた。信頼していた」と述べた後、ぜひ会場の方と話したいと、質問を求め、数人が挙手した。

元連合赤軍メンバーらが 次々と挨拶に立った

冒頭のサブライズの後、植垣さんの生涯に折り目折り目で関わった4人が登

壇。トップバッターは青砥幹夫氏。弘前大から軽井沢駅で逮捕されるまで「長い付き合いだった。みんな植垣を尊敬していた。哀惜の念を禁じ得ない」と死を悼んだ。

次は革命左派の前澤虎義氏。公開の席に立つのは数年ぶりだろう。「山」で2カ月余り一緒に過ごしたが思い出がない夜でも互いにヨタ話は全くなかった」「自分が渋川駅から逃げるとき、植垣はだまって見逃してくれた」。

3人目は大津卓滋弁護士。氏は弁護士になった当初、公安事件はやらないことに決めていたが、連合赤軍事件とは何だったのかという思いはずっと持っていた。植垣さんの控訴審の弁護を依頼された時、面会してから決めようと考えていたが「会ったとたんに意気投合した。それから16年、裁判と一緒に戦った」と述懐。植垣さんについて「会った時から清潔感と痛々しさを感じていた」と語ったのが印象的だった。

最後は雪野建作さん。革命左派のメンバーとして1971年2月に、栃木県真



「植垣康博さんを送る会」で発言する漫画家・山本直樹さん

岡市の銃砲店に押し入り、10丁の散弾銃と1500発の銃弾などを強奪した6人のうちの1人だ。雪野さんは逮捕されたため、山岳ベースでの総括の暴行・殺人には関わらなかったが、「私も罪深きでは永田洋子や森恒夫と同罪だ。山岳ベース以前に逃亡者を殺害した革命左派の行為を後から知り、肯定してしまっただけだ」と発言。また「植垣は当事者として連合赤軍事件を語ることが責務だと考えていた。バロンでの若い人たちとの交流を含め、責任を全うした人生だったと思う」と発言を締めくくった。

植垣さんの闘病姿に 場内は静まり返った

第2部は馬込伸吾氏による植垣さんの闘病生活の記録『2022年〜2025年 植垣康博氏 逝去までの記録』の上映だった。そして3部は、関心を持つ人々が短く追悼の辞を述べた。山岳から離脱した元革命左派の岩田平治氏、作家の雨宮処凛氏、漫画家で連赤事件を克明に追った「レッド」の作者・山本直樹氏、

救援連絡センターの山中幸男事務局長等々、どのスピーチも、故人への追悼の情にあふれ、植垣さんの明るいキャラクターを反映したのか、気持ちのいいものだった。

関心を集めたのが2部の映像だった。2022年、植垣さんが倒れる前後からの記録で、ほとんどの人が初めて見る姿だったので、場内は静まり返った。

そこで、その記録の撮影者であり、闘病する植垣康博さんに最も寄り添った1人である馬込伸吾さんに話を聞いた。

植垣康博さんの最期を 馬込さんが語った

植垣さんを撮り始めたのは2011年頃からです。私は赤軍派に関わった人々への関心があつて、連合赤軍はもちろん、よど号ハイジャックの実行犯を撮りにビヨンヤンへ行き、塩見孝也さんの清瀬市の市議選でもカメラを回しました。また日本赤軍の風景を追ってレバノンへも行きました。いまそれを「赤軍の人々」というドキュメンタリーにまとめようとして

ています。

植垣さんが体調を崩した2022年頃から、支援活動の折々でカメラを回していました。

2月22日、初めて植垣さんの家を訪ねました。その時点で、足もふらついて歩行が覚束ない。目もあまり見えないと言っていました。光熱費の督促状や郵便なども未開封なままでした。そこで行動できる人々で支援を始めました。

ところがここで問題が生じました。植垣さんに病院行きを勧めたのですが、ものすごく嫌がるんです。何度も何度も説得して、やっと病院での検査を承知させました。

PCR検査を受けたところコロナ陽性。その他、心不全、高血圧、肺炎、糖尿病などの疑いがあるということでした。でも本人は病院に行きたがらない。そしてとにかく「バロンを開けたい」という思いが強い。実際はとても無理で、そのまま緊急入院することになりました。

入院では「せん妄」が出て、大声を出して点滴を抜いて病室を出ようとする。

各種書類が乱雑に積まれていました。ほっておけないので、「連合赤軍事件の全体像を残す会」の雪野さんに相談して、雪野さんが呼びかけてくれた「植垣基金」から支出してもらいました。

でも、このことを報告すると、植垣さんは「余計なことするな!」と怒ったのです。その時は腹が立ちましたが、後から考えると、「残す会」をはじめかつての同志たちに負担をかけたくないという気持ちだったんだと思います。

高額療養費の申請にマイナンバーが必要なので取得を勧めたんですが「そんなもんいらない」とこれまたひどく声を荒げた。

とにかくこちらの言うことを聞かない。何でも1人でやろうとした。歩いて10分のところにあるバロンへも時々覗きに行っていたようです。

そんなある日、息子さんから電話があつて、「お父さんが病院に行ってくれない」と訴えられました。そこで電話で説得したんですが「馬込に言われて行くなんてことはしない。行くなら自分の意思

で行く」とえらい剣幕でした。「(前に)入院したからこんなことになった。これなら死んだほうがよかった」「俺はもうどこかに消える」なんて言うんです。他に罵詈雑言を浴びせられ、もう連絡するなとまで言われました。

ただ私は、要所々々で息子さんと交流していたので「君のところには会いに来るよ」と言いました。

病院の診断結果は「人工透析を受けないと半年で死ぬ」というものでした。でも素直に応じるようなご仁じゃない。結局、人工透析をしないまま3年余りを生きました。

診断の数日後、植垣家を訪ねました。植垣さんはベッドでうずくまったまま完全に動けなくなっていました。

そこで植垣さんから「馬込、この前は悪かったな」という言葉が聞かれました。ああ、植垣さん、元に戻ったかと嬉しさがこみ上げました。でもその夜の光景は忘れられないですね。トイレにも這って行く。絶望的な気持ちになりました。これはもう完全に介護が必要だと思ひ、



馬込さんが集会当日に映した映像より

「市役所に相談します。お金の心配はいらない」と伝えると、

「待て、バロンの常連にいい人がいる」と植垣さん。

その夜、バロンでその方、Hさんと会いました。Hさんは看護師で、話がすぐ通じました。翌日、Hさんと植垣宅を再訪。Hさんの説得で、さすがの植垣さんも「もう入院するしかないかな」と応じたので病院へ行きました。

診断結果は、「脑梗塞、右脳に病変あり、長年の放置の結果、血管がボロボロになっている」ということで、治療して完全麻痺を防ごうということになりました。

ただ植垣さんの意識ははっきりしていて、冗談も出るくらい。東京の仲間一言と水を向けると、口元に微笑さえ浮かべながら、

「まあ、なんとか生きてます。生きることに精一杯です」と答えました。2022年4月6日のことです。

10日くらい後に、ついにバロン閉店にしました。机の上には「残す会」のKさんが届けてくれた文字の拡大鏡が置いてあるが、「(これでも)全然ダメ」と言います。

目や体は不調であっても、相変らず、頭脳は健在でした。

「ガザで虐殺起こってるじゃない。どう思う？」

「えらいこっちゃ。アメリカが一人で起こしてるだけじゃん。アメリカがこの間動いたのは、結局、中国を抑えるため」云々…

この頃は食欲も健在でした。私や他の支援者が車いすを押して、よく近くのカフェへ行きました。コーヒーをズルズルツとすすり、ホットケーキを頬張ると、旨い旨いとよく咀嚼していました。

息子さんが訪ねると、やはり一番嬉しそう顔をしていましたね。

「生きてるうちに、あと何回…会ったときたいけどしょうがないな」

同意しました。今回の入院が、心を決めさせたようです。約10日後の閉店日にはその報を聞きつけた地元や地方の常連さん10人余りが、マスターなきバロンに集まりました。宴は夜が明けるまで続きました。

2023年3月、介護施設に入所

2022年9月にはリハビリ施設に移り、翌2023年3月、介護施設に入所しました。

このへんの手配は、静岡の救援グループ、特にMさんが親身になって動いてくださいました。Mさんが弁護士、元教師の方々などに声をかけて、強力な支援組織ができました。地元根付いた有力者が多く、行政との対応も手慣れたもので、本当に助かりました。

3月23日、植垣さんを施設に訪ねました。

「(私が)見える？」と問うと、

「ある程度しか見えない。ここへ来てから△△○○△△○○」

大腿骨の骨折から死去へ

2024年4月、植垣さんは施設で転倒し、大腿骨骨折の大怪我をしてしまいました。それで入院するのですが、これ以降、体力の消耗も激しくなりました。

明けて2025年1月に、息子さんから電話を受けました。施設から「誤嚥性肺炎かもしれない」と言われたというのです。すぐ施設に電話してみました。看護師は「今朝、発熱したけど、コロナでもインフルでもない。ミキサー食も嘔吐してしまふ」ので、誤嚥性肺炎の疑いがあるとのこと。病床に空きがなく救急搬送も考えたんですが、処置は施設でやることと同じだそうで、移動による負担が心配ということで、酸素吸入と抗生物質の点滴をやっていたきました。

2日後、息子さんと施設を訪ねました。げっそりと頬がこけ、呼吸も苦しそうでした。「息子さんが来たよ」と耳元で話しかけると、一生懸命、首をもたげようとし、何かを訴えかけていました。

ろれつがあやしく、耳を口元に近づけても、聞き取れない状態でした。でも脳は衰えてないので、会話は続きます。

「連赤の総括、終わってないから——」まだ死ねないでしようという私の質問に対し最後まで言わず、

「△△○○△△○○」とすぐ答えてくれました。

「(連赤の)50年にすごいマスコミの取材来たじゃん。あれ、疲れた？」

「疲れたねえ。やつぱり。人と会うのは疲れる」

昔のことを聞くと顔つきが鋭くなりますが、話すうちに言葉が不明瞭になっていきました。

7月9日。青砥幹夫さん、金廣志さん、雪野建作さんがお見舞いに来ました。植垣さんはベッドの横の椅子に座って迎えました。青砥さんが、

「弘前にいたときに、ガールフレンド紹介してくれたじゃないか。よく思い出すよ」

などと話しかけると、植垣さんもじつと耳を傾けていました。

翌23日、朝方、電話で植垣さんの訃報を聞きました。

出棺の時、親類と支援者でお別れをしました。火葬場へは、静岡救援会の人たちやバロンの常連も来てくれました。気を使って出棺には来なかったのだと思います。

植垣さんには「えらい好き勝手やってくれたな」と思います。野垂れ死にしたかったんでしようが、人はそう簡単には死ねない。今は、植垣さんのためにも息子さんを守りたいという気持ちが強いですね。

息子さんは今回の事で本当によく頑張つて、成長してくれました。尊敬に値します。

また、静岡の支援者や常連の方々はこの知らないところでも細かく植垣さんをサポートして下さいました。本当に感謝しています。

今回私は、映像作家としては、カメラを回すべきところで回しきれなかった。でも私個人としてはそれで良かったと思っています。